

指定辞ジャからヤへの移行における一現象

—撥音前接時におけるジャの多用—

小西いずみ

1. はじめに

指定辞(共通語の「だ」)の全国分布は、国立国語研究所(1966)『日本言語地図』第46図によって知ることができる。おおむね、東日本にダ、西日本にジャとヤが分布する。このうち西日本では、近畿中心部や北陸ではヤ、山陽や四国や九州ではジャが多い。前田(1964)、鎌田(1981)によると、ヤは、江戸時代末期の天保・弘化ごろ(1840年ごろ)大阪近辺でジャが変化して生まれたものという。

『日本言語地図』でジャが分布する地域でもヤへの移行が進んでいることが、真田(1979, 1983)、吉岡(1992)、陣内(1996)、岸江(1996)などによって報告されている。本稿では、ジャからヤへの移行が進み、すでにジャが劣勢となっている地域で、ジャが撥音前接時に多く用いられることを述べる。用例採取の資料としたのは、既存の方言談話録音資料である。

2. 先行研究

ジャと前接の撥音との関連について触れた先行研究には、愛宕(1969)による、石川県奥能登珠洲方言の報告がある。この方言では指定辞として、「ヤ」「ジャ(ヂャ)」「デア」が用いられており、このうち最も優勢なのはヤであるという。ジャ(ヂャ)は、ヤに対して劣勢であり、その大半例は撥音が前接音となる環境に現われ、なかでも「ナン」(何)、「モン」(物)などの特定語に接しやすいとされている。

小西(1999)は、富山県内の一部地域でも、ジャが撥音前接時に多く用いられることを示した。表1は、調査中の自然談話において、話者が調査者(小西)や同席者に対しての発話で用いた指定辞の数を示したものである。

表1 (小西1999の表1を一部改めた。凡例は表2,3,5と共通)

全 全用例数
 N+ 撥音前接の時の数(内数)
 N+/全 <全用例数>に対する<撥音前接の時の数>の割合

地点	全				N+				N+/全 (%)	
	ジャ	ヤ	ダ	デヤ	ジャ	ヤ	ダ	デヤ	ジャ	ジャ以外
砺波市安川	4	29	0	0	4	5	0	0	100.0	17.2
庄川町湯山	6	121	2	0	5	11	0	0	83.3	8.9
城端町城端	2	33	4	0	2	2	0	0	100.0	5.4
細入村猪谷	2	31	50	0	1	5	7	0	50.0	16.1
滑川市中川原	2	29	13	1	2	5	1	0	100.0	17.2
朝日町桜町	1	56	6	0	1	11	0	0	100.0	19.6
朝日町金山	9	121	7	1	7	7	1	1	77.8	5.8

表1の各地点における撥音前接のジャの例を1例ずつあげる。

- 砺波市安川 ドンナモンジャナー。(どんなもんだなあ。)
 庄川町湯山 ジェンジェンジャワ。(全然だわ。)
 城端町城端 ナンジャロー。(何だろう。)
 細入村猪谷 シタシーモンジャワネー。(親しい者だわね。)
 滑川市中川原 ナーンジャ。(いや、違う。)

「ナーン」は「いいえ」に近い言葉で、指定辞でこれを承けることができる。

- 朝日町桜町 ホンジャカラー。(そうだから、)
 朝日町金山 カンタンジャワノ。(簡単だね)

3. 用例採取に用いた資料と採取方法

奥能登や富山以外の地域でも、ジャからヤへの移行過程において同じ現象が見られるかどうかを調べた。用いたのは以下の2資料である。

- 1) 日本放送協会(1966-1967)『全国方言資料』第3~7, 8, 9巻 以下N資料
 (富山・岐阜・愛知より西の各地点、ただし沖縄県を除く。収録は1953-1962)
- 2) 国立国語研究所(1979-1982)『方言談話資料』(2), (4), (6) 以下K資料
 (奈良、高知、長崎、福井[1~5]、京都[1~4]、島根[1~3]、愛媛。福井、京都、島根は全体の約半量のみ用例を採取した。[]内が採取した部分のタイト

ル番号。収録は 1975-1976)

この 2 資料に収録されている各地点ごとに、テキストを参照しながら録音テープを聞き、指定辞の例を採った。ただし、K 資料の京都は、テープ不良のためテキストのみに依る。N 資料のうち、山口(1993-1995)によるテキストがある地点は、そちらを参照した。テープは 1～3 回聞き、聞き取りにくい例や指定辞としての認定に疑問がある例は除いた。どの地点でも、1 例以上、テキストと筆者の聞き取りとに相違がある。すなわち、テキストと違って聞こえた例や、テキストに「ヤ」「ジャ」と書かれていてもはっきり聞きとれなかった例がある。

4. 結果と考察

4.1. N 資料における指定辞の分布

まず、用いた資料における指定辞の使用状況を確認するため、図 1 を作成した。図 1 は、N 資料の各地点における各指定辞の使用率をグラフにし、地図化したものである。活用形の違いは問わず、終止形ジャ・ヤ、推量形ジャロー・ヤロー、過去形ジャッタ・ヤッタなどの活用形をあわせて計算した。過去の否定形「(行か)なかった」相当に ーンジャッタ・ーンヤッタが使われる地点では、これも含めた。九州では、終止形にジャル・ダル・ジャッ・ヤッ、推量形にジャイロー・ダイローが使われる地点があるが、これもジャやダやヤに含めた。図 1 の凡例中、「コッチャ類」としたのは、事ジャ・事ヤ→コッチャ、町ジャ・町ヤ→マッチャとなるような例である。「ニャ」は、撥音が前接する場合に現れる。

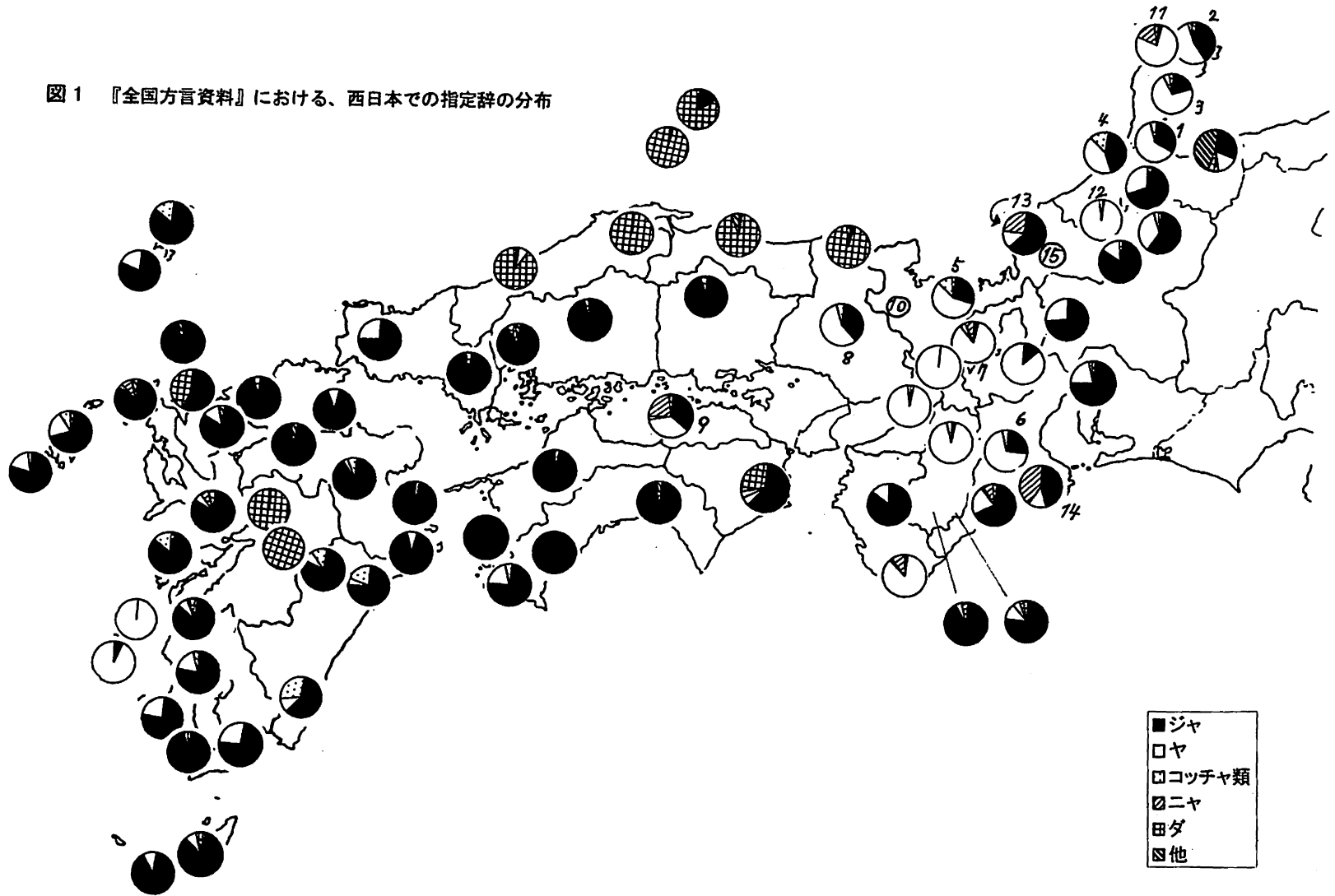
図 1 から、

- 1) 近畿中央では、ほとんどヤのみが使われる。
- 2) 近畿より東側に位置する北陸や東海では、ヤとジャが使われる。
- 3) 近畿より西側に位置する中国や四国や九州では、ジャが多い。ただし、4)5)の地域を除く。
- 4) 山陰や、九州の一部(熊本や唐津)ではダが使われる。
- 5) 九州では、離島などの周辺地域でヤが増える。

ということが確認できる。これら 1)～5)は、『日本言語地図』第 46 図や『九州方言の基礎的研究』30 図の分布と一致する。

最も北東の地点(3 巻所収、富山県入善町小擦戸)では「他」が多い。これは古態的なデ

図1 『全国方言資料』における、西日本での指定辞の分布



ヤである。また、徳島の地点(5巻所収、那賀郡延野村雄)ではダが約25%を占める。このダは、ほとんどがダローやダツタで、終止形は少ない。上野(1985)によると、古い形式のデアロー・デアツタが変化したものだという。

ここでは省略したが、K資料の各地点の使用状況も、図1の分布状況に準ずる結果となった。

4.2. 前接の撥音とジャとの関係

次に、N資料及びK資料の各地点において、奥能登や富山と同様の現象があるかどうかを確かめる。

ヤとジャを併用する地点は、通時的には古いジャから新しいヤへと移行する過程にあると解釈できる。1.で述べたように、文献国語史的研究によって、ジャが古くヤが新しいことは明らかになっている。図1から読み取れる1)~3)も、ジャが古くヤが新しいという解釈を導くものである。本論で問題としているのは、ジャからヤへの移行過程にある地点のうちでも、特に、すでにヤが優勢となった地点におけるジャの使われ方である。よって以下では、〈ヤとジャが同等〉または〈ヤが優勢でジャが劣勢〉という使用状況の地点を対象とする。

そのような地点ごとに、以下のような2×2の分割表に対する、独立性の χ^2 検定を行った。各地点における〈指定辞の数〉は話者全員の合計である。x, y, z, uの各マスが5以下の場合には、イエーツの補正を行った。

	A1:ジャの数	A2:ジャ以外の指定辞の数	計
B1:撥音前接[N+]の数	x:[N+]ジャ	y:[N+]ジャ以外	[N+]指定辞
B2:撥音前接以外[N以外+]の数	z:[N以外+]ジャ	u:[N以外+]ジャ以外	[N以外+]指定辞
計	ジャ	ジャ以外	指定辞の数

AとBの独立性の仮説が、有意水準5%で棄却される地点、すなわち、ジャかジャ以外かによって、撥音前接時の数に差があると言える地点を表2に記す。有意水準1%で棄却さ

表2

巻	地点	全						N+					N+/全 (%)	
		ジャ	ヤ	チャ	ニヤ	ダ	他	ジャ	ヤ	ニヤ	ダ	他	ジャ	ジャ以外
N3	1 富山県氷見市飯久保	24	55	5	0	1	1	23	1	0	0	0	96%	2% *
N3	2 石川県輪島市名舟町	44	61	3	0	1	4	16	9	0	0	3	36%	17%
N8	3 石川県鹿島郡能登島町向田	11	40	3	2	0	0	9	5	2	0	0	82%	16% *
N3	4 石川県石川郡白峰村白峰	32	32	11	0	0	0	31	2	0	0	0	97%	5% *
N3	5 福井県遠敷郡名田庄村納田終	22	45	9	2	0	0	19	17	2	0	0	86%	34% *
N4	6 三重県一志郡美杉村川上	15	42	3	0	0	0	11	13	0	0	0	73%	29% *
N4	7 滋賀県高島郡朽木村	4	100	5	8	0	0	4	18	8	0	0	100%	23% *
N4	8 兵庫県神崎郡神崎町粟賀	46	73	8	1	0	0	41	15	1	0	0	89%	20% *
N5	9 香川県三豊郡詫間町大浜肥地木	25	26	2	17	2	0	19	2	17	1	0	76%	43% *
K4	10 京都府綾部市高槻町字観音堂・桜	14	76	0	3	1	0	10	22	3	1	0	71%	33%

れる地点には“*”を付す。「チャ」はコッチャ類のことである。

表2のいずれの地点でも、<[N+]ジャ/全ジャ>が<[N+]ジャ以外/全ジャ以外>より大きいので、この検定の結果は、「ジャは、ジャ以外よりも、前接が撥音という環境で使われることが多い」ことを示す。

表2の地点番号は、図1の番号に対応する。図1を見ると、表2にあげた地点は、北陸から近畿周辺部における<ヤが優性でジャが劣勢>の地点の多くを占めることが分かる。表3の2地点は、この一帯に位置し、用例数が少なく独立性の仮説が棄却されなかったものの、撥音前接のジャが1例得られた地点である。

表3

巻	地点	全						N+					N+/全 (%)	
		ジャ	ヤ	チャ	ニヤ	ダ	他	ジャ	ヤ	ニヤ	ダ	他	ジャ	ジャ以外
N8	11 石川県輪島市海士町	1	23	0	5	1	0	1	5	5	0	0	100%	22%
N3	12 石川県河北郡内灘村大根布	1	91	3	0	0	0	1	14	0	0	0	100%	15%

表2と表3には、石川県の地点が多いが、この県の収録地点が多いためであり、特に石川県においてジャと撥音との関係が強いとは言えない。

4.3. 「モン(物)」「ナン(何)」とジャとの関係

愛宕(1969)は、奥能登珠洲方言のジャは、特に「モン(物)」、「ナン(何)」などの特定語に接しやすいと述べている。このような特定語との関係が、表2の地点においても見ら

表4

地点	N+ジャ			N+ヤ			N+ニヤ			N+ダ・他					
	モン	%	ナン	%	他	%	モン	%	ナン	%	他	%	モン	ナン	他
1	17	73.9	1	4.3	5	21.7	1	100	0	0	0	0	0	0	0
2	6	37.5	2	12.5	8	50.0	5	55.6	2	22.2	2	22.2	0	0	0
3	5	55.6	1	11.1	3	33.3	3	60.0	0	0	2	40.0	2	0	0
4	8	25.8	9	29.0	14	45.2	0	0	1	50.0	1	50.0	0	0	0
5	3	15.8	1	5.3	15	78.9	0	0	2	11.8	15	88.2	0	1	1
6	3	27.3	3	27.3	5	45.5	4	30.8	3	23.1	6	46.2	0	0	0
7	1	25.0	1	25.0	2	50.0	4	22.2	4	22.2	10	55.6	0	1	7
8	5	12.2	8	19.5	28	68.3	2	13.3	3	20.0	10	66.7	0	1	0
9	1	5.3	0	0	18	94.7	0	0	0	0	2	100	2	2	13
10	6	60.0	0	0	4	40.0	3	13.6	0	0	19	86.4	0	0	3

れるだろうか。

表2の各地点における、撥音前接時の前接語の内訳を表4に示した。「モン」は、「(昔はお手玉をして)遊ンダモンジャ。」のような形式名詞の例がほとんどだが、わずかに「オ粗末ナモンジャケド、(受け取って下さい。)」のような実質名詞の例を含む。「者」は「モン」に含めず、「他」に含めたが、この数もわずかである。

表4の<N+ジャ>の内訳を見ると、確かにモンもナンも、前接語のうちのいくらかの割合を占めている。特にモンは多い。しかし、地点10を除き、<N+ヤ>の場合も、モンやナンは同様の割合を持つことが分かる。よって、ジャがモンやナンという特定語につきやすく見えるのは、「<N+指定辞>のとき、その前接語にはモンやナンが多い」ためと考えられる。なお、ここでは「他」に含めたが、準体助詞ンの数もかなり多い。この割合も<N+ジャ>と<N+ヤ>で大きな違いがない。

4.4. ニヤについて

図1を見ると、前接が撥音の場合に、ニヤとなる地点がいくつかある。特にニヤが目立つのは、次の表5の地点と、表2の地点9である。

表5

巻	地点	全					N+					
		ジャ	ヤ	チャ	ニャ	ダ	他	ジャ	ヤ	ニャ	ダ	他
N3	13 福井県丹生郡織田町おい松	50	11	0	20	0	0	31	3	20	0	0
N4	14 三重県志摩郡浜島町南張	26	8	0	24	0	0	6	3	24	0	0
K4	15 福井県武生市下中津原町	16	110	6	42	4	0	11	41	42	0	0

この〈N+ニャ〉は、〈N+ジャ〉の表層形なのか、〈N+ヤ〉の表層形なのか、判断できない。〈N+ヤ〉とすると、「山野」がサンニャと発音されるような、いわゆる「連声」のひとつと言える。

5. おわりに

本稿では、新しい指定辞ヤに圧されてジャが劣勢となっている地点で、ジャが撥音前接時に多く用いられることを報告した。

この現象は、撥音が後ろの音に影響を及ぼすという点で、「連声」の現象と類似する。しかし、指定辞ジャの場合は、歴史的に前後関係にある文法的要素の選択に関わるという点で特異である。今後、連声とあわせて、日本語の歴史的中央語や現代諸方言における撥音の性格という観点から捉え直してみたい。

付記

ご指導いただいた篠崎晃一先生、荻野綱男先生にお礼申し上げます。

／引用文献／

愛宕八郎康隆(1969)「奥能登珠洲方言の「デア・ジャ・ヤ」」『国文学攷』49

上野智子(1985)「阿波方言の「ダ」「ジャ」「ヤ」」『方言研究年報』28

鎌田良二(1981)「関西に於ける地方共通語化について」『国語学』126

岸江信介(1996)「宮崎方言の世代差と地域差—指定辞「ダ」・「ジャ」・「ヤ」をめぐる—」『九州方言研究会報告書』九州方言研究会

九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房(改訂版1991)

国立国語研究所(1966)『日本言語地図』第1集, 大蔵省印刷局

----- (1979-1982) 『方言談話資料』 (2), (4), (6)

小西いずみ (1999) 「富山県における指定辞の分布と変遷」 『日本語科学』 5, 国立国語研究所 (印刷中)

真田信治 (1979) 「一集落内における敬語行動」 『地域語への接近』 秋山書店

----- (1983) 「「ジャ」と「ヤ」の闘争過程——集落全数調査と録音文字化資料から——」
東北大学 『国語学研究』 23

陣内正敬 (1996) 「西日本方言の変容と関西方言」 小林隆他編 『方言の現在』 明治書院

日本放送協会編 (1966-1967) 『全国方言資料』 第3~7, 8, 9巻, 日本放送出版協会

前田勇編 (1964) 『近世上方語辞典』 東京堂出版

山口幸洋編・監修 (1993-1995) 「NHK 全国方言資料テキスト」 (1)~(3)

吉岡泰夫 (1992) 「九州方言の現在」 『日本語学』 11-8

(こにし・いずみ 東京都立大学大学院)